

別添4

様式第4号-1

調整価格算定表

市 町
 区 地内
 郡 村

地域の種別()

等級 区分	筆数	取得面積	調整前の各画地 の価額の総額	調整後の各画地 の価額の総額	摘要
1					
2					
・					
・					
計					

備考 1 「等級区分」は、等級区分を行う場合に付するものとし、調整後のもので表示するものとする。

2 本表は、別添2様式第2号-1「土地取得価格算定表」の「地域の種別」ごとに作成するものとする。

3 添付図面は、実測平面図(250分の1～500分の1)とする。

調整を行う理由

調整価格算定内訳表

市 町
 県 郡 区 村 地内

等級 区分	番号	地域の 種別	画地 の所 在・ 地番	(A) 面積 (㎡)	(B) 標準 地評 価格	調整前価額			調整後価額	
						(C) 格差率	(D) 算定価格 (B)×(C)	(E) 価 額 (A) × (D)	(F) 算定価格 (E)÷(A)	(G) 価 額 (A) × (F)
1									—	—
									—	—
									—	—
									—	—
									—	—

計	—	—	筆		—	—	—			
2									—	—
									—	—
									—	—
									—	—

計	—	—	筆		—	—	—			
・									—	—
・									—	—
・									—	—
・									—	—
合計	—	—	筆		—	—	—			

- 備考 1 本表は、A4判縦長又はA3判横長の規格で作成すること。
 2 「等級区分」は、等級区分を行う場合に付するものとし、調整後のものに表示するものとする。
 3 「番号」は、別添様式第2号-1の番号と一致させること。

参考1 作成例

1 標準地評価調書(案)

[表紙]

年 月 日

標準地評価調書(案)

殿

会社名 印

貴殿よりご依頼がありました下記案件につきましては、
本書をもってご報告申し上げます。

記

1 工事名

2 所在地

3 価格時点

作成者 印

(日本産業規格A列4判縦)

←目次1-(1)の工事名を記載する
○○川左岸○○築堤工事
一般国道○号○○改築工事

年度

標準地評価調書(案)

(日本産業規格A列4判縦)

[目次]

	目	次
1	概要	
	(1) 工事名	
	(2) 取得箇所	
	(3) 取得計画	
2	標準地評価格算定表	
3	一般的要因の把握	
4	地域分析	
	(1) 近隣地域の分析	
	(イ) 地域の判定	
	(ロ) 地域の範囲	
	(ハ) 地域要因調査表	
	(ニ) 地域の特性とその特性が地域内の不動産に与える影響	
	(2) 類似地域の分析	
	(イ) 地域の範囲	
	(ロ) 地域要因調査表	
5	個別分析	
6	標準地の選定	
7	標準地評価格の算定	
	(1) 試算価格	
	比準価格	
	収益価格	
	積算価格	
	(2) 規準価格	
	(3) 鑑定評価格	
	(4) 試算価格の調整と標準地評価格の決定	
8	試算価格算定表	
	(1) 比準価格算定表	
	(イ) 比準価格算定の要旨	
	(ロ) 事情補正	
	(ハ) 時点修正	
	(ニ) 建付減価補正	
	(ホ) 価格形成要因格差率	
	(2) 収益価格算定表	
	(イ) 収益価格算定の要旨	
	(ロ) 収益価格の算定要因	
	(ハ) 価格形成要因格差率	
	(ニ) 賃貸事例調べ	
	(3) 積算価格算定表	
	(イ) 積算価格算定の要旨	
	(ロ) 価格形成要因格差率	
9	規準価格算定表	
	(イ) 規準価格算定の要旨	
	(ロ) 時点修正	
	(ハ) 価格形成要因格差率	

10 標準地の評価格から評価した土地の価格の調整

(添付図書)

- 1 鑑定評価書
- 2 位置図(縮尺50,000分の1)
- 3 一般平面図
- 4 地域の種別の区分図、公示地、基準地、取引事例地及び標準地の位置並びに価格の表示図(縮尺1,000分の1～5,000分の1)
- 5 実測平面図(縮尺250分の1又は500分の1)

[調書内容]

1 概要

(1) 工事名

(○○川左岸○○築堤工事
一般国道○号○○改築工事)

(2) 取得箇所

市 町 地内
村
(左岸K/ ~ K/ 、ℓ= m
測点番号 No. ~No. 、ℓ= m)

(3) 取得計画

区分	全体	年度迄	年度	残(年度迄完了予定)	摘要
移転戸数	戸	戸	戸	戸	
土地の面積	m ²	m ²	m ²	m ²	
取得計画額	千円	千円	千円	千円	

2 標準地評価額算定表

県 郡 区 町 地内
市 村

(単位：1m²当たり円)

標準地 番号	地域の 種別	所在 及び 地番	現況 地目	面 積	比準 価格	収益 価格	積算 価格	規準 価格	鑑定評 価 格	評 価 時 点	年 月 日
										標準地 評価額	摘 要

3 一般的要因の把握

今回取得に係る○○市は、○○県のほぼ南に位置し、人口約○○万人で県人口の約○%を占めている。人口増加率は○○県で第○位にランクされ、今後の伸び率も当市における工場誘致計画等からみても○○市に次いで高い率を示すものと思われる。

○○県は、昭和○○年まで農業主体の行政がなされ、特に県北部を中心として生産される○○は、その名が全国的に知られている。しかし、昭和○○年頃より全国的な工場分散政策により交通手段の立地性に優れ、かつ、労働力の過剰地域であった○○市や当市の企業進出にみられるように○○県も半農半工型の経済体系へと変遷をとげている。

○○市は、国道○○号や○○港という交通条件に恵まれ、かつ、県や市の積極的な企業誘致政策を行ったため、昭和○○年新産業都市の指定とともに○○工業が進出して以来、各種企業が進出し産業構造にも大きな変化がみられ、産業別人口も昭和○○年第1次産業が全体の○○%を占めていたものが、現在は、○○%となり逆に第2次産業及び第3次産業が○○%を占めるようになり、それに伴い市財政も徐々にではあるが、黒字的な財政基盤が確立され、かつ市民の税負担率も軽減されつつあるし、又失業率も低率を保っている。

当市には、JR○○線が市の南北を、国道○○号が東西を、又は国道を幹線として県道○○線、○○線等が縦横に走っている。JR○○線○○駅は、急行停車駅であり、一日当り乗降客は、約○万人に達しており、当市における重要な動脈となっている。又、国道を中心として私鉄○○バスが市域の隅々にまで運行しており、街路網の整備状況は、県下でも高い水準である。

商業の中心は、○○商店街及び○○商店街で、○○駅を中心として形成されており、その

商圏は、隣接町村にまで及んでいる。このような状況の中で不動産取引は、活発となり、一部スプロール現象も見られたが、昭和〇〇年計画的な都市の形成を図るべく、用途地域の指定がなされ、市街地の高層化、国道、県道を中心とした宅地開発が計画的に行われている。

(注) 一般的要因の把握について

一般的要因とは、一般経済社会における不動産のあり方及びその価格の水準に影響を与える要因をいうもので、その内容としては、社会的、経済的、行政的要因の三つに大別される。その範囲としては、各行政単位(県単位、市単位等)について行うものとし、下記の点に留意して行うこととする。

(1) 社会的要因

- ㊦ 人口の状態……………総人口、人口の変動及び将来の動向等
- ㊧ 都市形成の状態……………市街地的形態をなしているか否か及び進んでいるか、衰退しているか等
- ㊨ 公共施設の整備の状態…学校、病院、公園等の配置の状態、位置、利便性及び集中の度合等

(2) 経済的要因

- ㊩ 産業構造の状態……………現在の主な産業及び将来の動向、産業別人口の状態及び推移等
- ㊪ 交通体系の状態……………主要交通機関及び主要道路網の配置及び利便性等の状況等

(3) 行政的要因

- ㊫ 土地利用に関する計画及び規則の状態……………都市計画法による用途区分、農振法による用途区分等

4 地域分析

(1) 近隣地域の分析

(イ) 地域の判定

今回取得する地域は、JR〇〇線〇〇駅の東方約〇〇kmに位置し、一般国道〇〇号より約〇m入った低丘陵地に存する一般住宅地域である。この地域は、比較的小規模な敷地に木造平屋、二階家の一般住宅のほか、アパート、小売店舗が混在し、又学校、病院、その他公共施設等が至近距離にあるため、居住環境の良好な地域であり、都市計画法上住居地域に指定されている。

以上のような状況に基づき、地域区分を標準住宅地域と判定した。

(ロ) 地域の範囲

別添図面のとおり

(ハ) 地域要因調査表

別表のとおり(別表については、類似地域を含めた参考4によることができる。)

別表

地域要因調査表(近隣)

条件	項目	細項目	内 容
街路条件	街路の幅員・構造等の状態	幅員	近隣地域における標準的な街路の幅員約〇m
		舗装	大部分がアスファルト舗装によって舗装
		配置	比較的均衡がとれている。
		系統及び連続性	幹線街路への連続性は優れている。

		(除雪施設等)	
交通・接近条件	都心との距離及び交通施設の状況	最寄駅への接近性	C駅へ約〇km(C市営バス利用可)
		都心への接近性	A市までの約〇分
	商店街の配置の状況	最寄商店街への接近性	C駅前周辺の商店街へ約〇km
		最寄商店街の性格	店舗の数および連たん性に優れた商店街、スーパーもあって良好である。
学校・公園・病院等の配置の状況	小学校・公園・病院・官公署等	小学校へ〇m、市立病院、市役所までは約〇m	
環境条件	気象の状況	日照、温度、湿度、通風等	南側斜面の丘陵地で、日照、通風等が優れている。
	自然的環境の良否	眺望、景観、地勢、地盤等	丘陵地であるため、眺望、景観は良好。
	居住者の移動等の状況	居住者の増減、家族構成等	
	社会的環境の良否	社会的環境の良否	普通
	各画地の面積・配置及び利用の状況	画地の標準的面積	〇m ²
		各画地の配置の状況	各画地の地積、形状等の均衡がとれ、整然としている。
		土地の利用度	建物の疎密度〇%
		周辺の利用の状況	丘陵地に存する閑静な一般住宅地域
	供給処理施設の状況	上水道	完備
		下水道	無
都市ガス等		完備	
危険施設・処理施設等の有無	危険施設、処理施設等の有無	無	
災害発生の危険性	洪水、地すべり等	無	
公害発生の程度	騒音、大気汚染等	特になし	
行政的条件的	土地の利用に関する公法上の規制の程度	用途地域及びその他の地域、地区等	住居地域、建ぺい率〇%、容積率〇%
		その他の規制	無
その他	その他	将来の動向	現状で推移するものと考えられる。
		その他	

(二) 地域の特性とその特性が地域内の不動産に与える影響

今回取得に係る近隣地域は、一般国道〇〇号の背後地に存し、低丘陵地を造成してつくられた新興住宅地域である。〇〇市は、新産業都市の指定の影響による各種企業の進出に伴い、人口の増加が著しく、さらに核家族化による世帯分離により、当市周辺の丘陵地での宅地開発は盛んで、一般国道〇〇号及び県道〇〇線を中心として〇〇団地、〇〇団地等の既成団地があるほか、他に3カ所で県の住宅供給公社や民間ディベロッパーによる大規模団地の建設がなされている。これらの住宅地のうち、当該近隣地域は、〇〇市の中心市街地まで約〇〇kmと近接し、一般国道を中心とするバス路線の運行回数は、1日〇〇便と多いため、住宅地としての利便性に優れ、さらに小学校、中学校とも国道を隔てた隣接地域に存するため、居住環境としては、良好であり、居住者層も一般サラリーマンがその大半を占めている。このため地域内の不動産の取引も活発であり、地価水準も他の居住地に比してやや高めである。

(2) 類似地域の分析

(イ) 地域の範囲

別添図面のとおり

(ロ) 地域要因調査表

別表のとおり(別表については近隣地域を含めた参考4によることができる。)

〈別表〉 地域要因調査表(類似)

条件	項目	細項目	内 訳
街路条件	街路の幅員・構造等の状態	幅員	近隣地域における標準的な街路の幅員約〇m
		舗装	大部分がアスファルト舗装によって舗装
		配置	比較的均衡がとれている。
		系統及び連続性	幹線街路への連続性は優れている。
		(除雪施設等)	
交通・接近条件	都心との距離及び交通施設の状態	最寄駅への接近性	C駅へ約〇km(C市営バス利用可)
		都心への接近性	A市までの約〇分
	商店街の配置の状態	最寄商店街への接近性	C駅前周辺の商店街へ約〇km
		最寄商店街の性格	店舗の数および連たん性に優れた商店街、スーパーもあって良好である。
学校・公園・病院等の配置の状態	小学校・公園・病院・官公署等	小学校へ〇m、市立病院、市役所までは約〇m	
環境	気象の状態	日照、温度、湿度、通風等	南側斜面の丘陵地で、日照、通風等が優れている。
	自然的環境の良否	眺望、景観、地勢、地盤等	丘陵地であるため、眺望、景観は良好。
	居住者の移動等の状態	居住者の増減、家族構成等	
	社会的環境の良否	社会的環境の良否	普通
境	各画地の面積・配置及び利用の状態	画地の標準的面积	〇m ²
		各画地の配置の状態	各画地の地積、形状等の均衡がとれ、整然としている。

条 件		土地の利用度	建物の疎密度〇%
		周辺の利用の状 態	丘陵地に存する閑静な一般住宅地域
	供給処理施設の 状態	上水道	完備
		下水道	無
		都市ガス等	完備
	危険施設・処理 施設等の有無	危険施設、処理 施設等の有無	無
災害発生の危険 性	洪水、地すべり 等	無	
公害発生の程度	騒音、大気汚染 等	特になし	
行政 的 条 件	土地の利用に関 する公法上の規 制の程度	用途地域及びそ の他の地域、地 区等	住居地域、建ぺい率〇%、容積率〇%無
		その他の規制	
そ の 他	そ の 他	将来の動向	現状で推移するものと考えられる。
		そ の 他	

(注) 地域分析について

(1) 近隣地域の分析

一般的要因を把握して、地域分析を行うにあたっては次の三点に留意して判定するものである。

- ① その不動産がどのような地域に属するか。
- ② その地域は、どのような地域的特性を有するか。
- ③ その特性は、その地域内の不動産の価格形成上、全般的にどのような影響力を有するか。

(イ) 地域の判定

地域分析のうち①その対象不動産がどのような地域に属するかについて判定することで、すなわち取得対象地を含む近隣地域の用途的地域の区分を行うものであり、次の点に留意する必要がある。

- a 取得しようとする対象地を含む近隣地域の位置、これは主要交通機関及び主要道路等から判断
- b 近隣地域内の現在における土地利用状態及び将来の動向等
- c 都市計画法上の用途区分との関連

(ロ) 地域の範囲

地域の範囲の判定にあたっては、その地域内におけるそれぞれの土地価格水準が30パーセント(画地条件を除く)以内に分布する地理的範囲を一応の目安として行う。

(ハ) 地域の特性とその特性が地域内の不動産に与える影響

地域分析の②その地域はどのような地域的特性を有するか、③その特性は、その地域内の不動産の価格形成要因上全般的にどのような影響力を有するか、について判定するものであり、近隣地域、近隣地域を含むより広域的地域、近隣地域の周辺にある

他の地域を分析することにより、地域の特性を見出し、ひいてはその特性により地域の地価水準への影響度の説明を行うことであり、特に、次の点に留意すべきである。

- ① 近隣地域の位置条件(地域の形成過程)
- ② 近隣地域周辺の状態(用途的区分、将来の動向)
- ③ 近隣地域周辺及び他の類似地域に対しどのような状態にあるか。
- ④ 以上の要素により地域内の不動産に対し、価格水準がどのような影響があるか。

5 個別分析(標準的使用の判定)

地域の特性及びその特性が地域内の不動産に与える影響で述べたとおり、今回取得に係わる近隣地域は、都市計画法上、住居地域に指定されており、又〇〇市のベッドタウンとして位置づけられるが、その一般的使用は低層1戸建住宅敷地として利用されているものが、当該地域の建物のほぼ〇%を占めている。

以上の状況に基づき、当該近隣地域の標準的使用を中品等の低層1戸建住宅敷地と判断した。

〈別表〉 個別的要因調査表(標準地)

条件	項目	細項目	内 容	内 容
街路条件	接面街路の系統・構造等の状態	系統及び連続性	接面する街路の系統および連続性は標準的なものと同程度	
		幅員	約〇m市道	
		舗装	未舗装	
		(除雪施設等)		
交通・接近条件	交通施設との距離	最寄駅への接近性	C駅へ約〇km(C市営バス利用可)	
	商店街との接近の程度	最寄商店街への接近性	C駅前周辺の商店街へ約〇km	
	公共施設等との接近の程度	幼稚園、小学校、公園、病院、官公署等	小学校へ約〇m、市立病院、市役所へいずれも約〇m	
環境条件	日照・通風・乾湿等の良否	日照、通風、乾湿等	北側に市道があり、日照、通風、乾湿とも普通	
	地勢・地質・地盤等の良否	地勢、地質、地盤等	南側斜面の丘陵地で地勢、地質、地盤ともに普通	
	周囲の状態	隣接地の利用状況	いずれも一般住宅の敷地	
	供給処理施設の状態	上水道	完備	
		下水道	無	
都市ガス等		完備		
危険施設・処理施設等との接近の程度	危険施設、処理施設等の有無	無		
画地条件	地積・間口・奥行・形状等	地積	〇m ²	
		間口	約〇m	
		奥行	約〇m	
		形状	長方形	
	方位・高低・角地・その他接面	方位	北側	
	高低	接面街路より〇cm高、隣接地とほぼ等高		

件	街路との関係	角地その他	中間画地
		崖地部分	無
		私道負担	無
	その他	高圧線等	無
行政的 条件	公法上の規制の 程度	用途地域及びそ の他の地域、地 区等	住居地域、建ぺい率○%、容積率○%
そ の 他	そ の 他	そ の 他	

(注) 個別分析について

個別分析とは、対象不動産の個別的要因を分析することにより、その最有効使用を判定するものである。したがって調書作成にあたっては、次の2点に重点を置き説明を行うこととする。

① 対象不動産の属する用途的地域の判定(都市計画法上の用途地域の区分と現実の利用状況を説明)

用途的地域の判定を行うにあたっては、都市計画法にいう用途地域と必ずしも一致するものでなく同一の用途地域内においても、用途の同質性においてニュアンスの異なるいくつかの地域を想定することが可能な場合もあるので注意を要する。

② 対象不動産の存する地域の一般標準的使用

個々の不動産は、当該地域の地域的特性に適合するあらゆる使用方法のうち、その効用を最高度に発揮するような用途並びに建物の種類、規模等であることが最有効使用といえる。したがって最有効使用の判断は、対象不動産の存する地域の一般標準的使用を有力な標準として判定することとなる。

6 標準地の選定

標準地の選定にあたっては、個別分析で述べたとおり、当該近隣地域の標準的使用を中品等の1戸建住宅敷地と判断したので、その個別的要因について別表のとおり分析し、それに基づき標準地を選定した。

(注) 標準地の選定について

処理要領第5条に基づき、近隣地域内において最も標準的な画地を選定する。したがって標準地は、起業地内外を問わず、特に起業地外に標準地の選定を行う場合は、①場所については実在地とし、②画地の形状については、実在、想定を問わない。ただし、鑑定評価依頼との関係もあるため、できるだけ実在地を選定する。

7 標準地評価格の算定説明

(1) 試算価格

比準価格	円
収益価格	円
積算価格	円

(2) 規準価格

円

(3) 鑑定評価格 円

(4) 試算価格の調整と標準地評価格の決定

土地評価に当って、上記試算価格を再吟味すると比準価格は、信頼性の高い近隣地域及び同一需給圏内に存する資料から求められた結果であり、各事例の試算値も〇〇〇円から〇〇〇円までと開差が比較的小さく妥当な価格といえる。

収益価格は、対象不動産が大規模団地内にあり、自用の建物が多い住宅地域であるため居住の快適性が賃料に反映しにくく低位にならざるを得ない。

積算価格は、新規の宅地開発事業に基づき実際に要した造成工事費等により試算したものであり、妥当なものとするが若干の想定部分を含むものである。よって比準価格を重視し収益価格及び積算価格をも相互に関連させ、また、規準価格との開差も約〇%の範囲にあり充分均衡を保っており、さらに鑑定評価格を参考とし、標準地評価格を1m²当り〇〇〇円と決定した。

8 試算価格算定表

(1) 比準価格算定表

県 郡 区 町 地内
市 村

(単位：1m²当たり円)

事例 地番 号	地域 の種 別	所在 及び 地番	売 買				(b) 事情 補正 率	(c) 時点 修正 率	(d) 建付 減価 補正 率	(e) 価格形 成要因 格差率	試算価格 (a) × (b) × (c) × (d) × (e)	比 準 価 格	摘 要
			年月	地目	面積	(a) 価格							

(イ) 比準価格算定の要旨

各比準価格は開差も少なく、ほぼ均衡が得られた。各事例地の実情及び手順の各段階を再検討し、対象物件ともっとも類似している事例〇より試算して求めた価格を中心に比準価格を1m²当り〇〇〇円とした。

(ロ) 事情補正

各事例につき取引事情を精査の結果、事例〇〇については、敷地拡張のため取得したもので買込みが認められるので〇%の補正を行い、その他の事例については補正すべき特段の事情はない。

(ハ) 時点修正

発表期間 当該地価公示価格の対前年変動率に基づき経過期間に相当する変動率を採用した。

未発表期間 上記対前年度変動率を適用し、経過期間に相当する変動率を採用した。

公示地() 年 月 日 円/m²
> + %
" 年 月 日 円/m²
> + %
" 年 月 日 円/m²
> + % (見通しによる。)

価格時点

時点修正率

$$\text{事例-1} \quad \left(1 + \frac{\quad}{12}\right) \times \left(1 + \quad\right) \times \left(1 + \frac{\quad}{12}\right) \div$$

$$\text{事例-2} \quad \left(1 + \frac{\quad}{12}\right) \times \left(1 + \frac{\quad}{12}\right) \div$$

$$\text{基準地} \quad \left(1 + \frac{\quad}{12}\right) \div$$

(二) 建付減価補正

事例〇〇については、建物が存するため専門家の意見を求め控除方式により減価率を〇〇%と認定した。

(ホ) 価格形成要因格差率

別表により求められた要因格差率による。

(2) 収益価格算定表

土地残余法にもとづく収益価格算定表(宅地)

県 郡 区 町 地内
市 村

(単位：1m²当たり円)

事例地番号	地域の種別	所在及び地番	建物及びその敷地に係る			(d) 建物に帰属する純収益	(e) 土地に帰属する純収益 (c) - (d)	(f) 敷地面積	(g) 土地の還元利回り	(h) 価格形成要因格差率	1m ² 当たり試算価格 $\frac{(e) \times (h)}{(f) \times (g)}$	収益価格	摘要
			(a) 総収益	(b) 総費用	(c) 純収益 (a) - (b)								

(イ) 収益価格算定の要旨

近隣の状況は、中規模の一般住宅が多い新興住宅地であり、賃貸用アパートも散見される。価格算定にあたっては、土地残余法に基づき把握した土地に帰属する純収益を土地の還元利廻りで除した価格を算定価格とした。

(ロ) 収益価格の算定要因

① 総収益

家賃収入 1戸当月額30,000円×8戸×12ヶ月=2,880,000円

敷金運用益 1戸当月3ヶ月分運用利廻り6%

30,000×8戸×3ヶ月=720,000

720,000×0.06=43,200円

計 2,923,200円

② 総費用

減価償却費 残存耐用年数 23年 残存率 0

積算価格16,744,000円

16,744,000×1/23=728,000円

修繕費 積算価格の1%

16,744,000×0.01=167,440円

(イ) 積算価格算定の要旨

当該地は一つの団地として、造成されたものであり、当該団地の実施設計及び工事に関し、造成時点における素地買収費、開発負担金、支払金額をもとにして時点修正を行なった造成工事費、設計料、その他の直接経費及び事業主が通常負担する販売費及び一般管理費等により積算価格を算出した。

素地価格については、取引時点が古く環境条件等の変化も著しいので現時点における取引事例等を調査のうえ算出した。

造成費及び付帯費用は別紙のとおりで、支払金額については実際施工者より証明書を徴収し、これを基にして算出した。

(ロ) 価格形成要因格差率…別表により求められた要因格差率による。

9 規準価格算定表

県 郡 区 町 地内
市 村

(単位：1m²当たり円)

地域の種別	公示地又は基準地				公示価格等からの規準			規準価格	摘要
	番号	所在及び地番	地目	(a) 価格	(b) 時点修正率	(c) 価格形成要因格差率	算定価格 (a) × (b) × (c)		

(イ) 規準価格算定の要旨

対象地の存する近隣地域内に地価公示地〇〇〇が設置されており、これは規範性が高く、価格規準の基礎となる土地として選定した。規準価格を算定した結果、標準地評価格との開差率も〇〇%となっており均衡を得ているものと判断した。

(ロ) 時点修正

別紙のとおり

(ハ) 価格形成要因格差率…別表により求められた要因格差率による。

(注) 規準価格との開差率について

要領第10条にかかる標準地の評価を行うに際しては、公示地または基準地との均衡を保持することと規定されており、標準地評価格を決定する場合は、公示地または基準地から規準を行うこととしているが、この場合標準地評価格と規準価格との開差率

$(1 - \frac{\text{標準地評価格}}{\text{規準価格}})$ が20%以内の程度あれば均衡を得ているものと解する。

しかし20%以上を超えるような開差率が生じた場合は、均衡を得ているとはいいがたいため、そのような開差率が生じた場合は、均衡保持ができない理由を付することとする。

(別表)

価格形成要因格差率算定表

事例地公示地等の番号	事例地公示地等の区分	地域の種別	近隣地域類似地域の区分	標準化補正率 (A)						
				街路条件	交通接近条件	自然的条件	環境条件	宅地化条件	画地条件	行政的条件
				() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100

標準化補正率 (A)		地域要因格差率 (B)								
その他	格差率の逆数	街路条件	交通接近条件	自然的条件	環境条件	宅地造成条件	宅地化条件	行政的条件	その他	格差率
() 100	100 ()	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100

個別的要因格差率 (C)									要因格差率 (A) × (B) × (C)	摘要
街路条件	交通接近条件	自然的条件	環境条件	宅地化条件	画地条件	行政的条件	その他	格差率		
() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	

10 標準地の評価格から評価した土地の価格の調整

調整価格算定表

県 市 区 町 地内
郡 郡 村

等級区分	筆数	取得面積	調整前の各画地の価額の総額	調整後の各画地の価額の総額	摘要
1	○	○ ○	○○○○○	△△△△△	*等級が別れる場合は等級毎に計上すること。 *等級が別れる場合は等級毎に実測平面図に表示すること。
2	○	○ ○	○○○○○	△△△△△	
計	○○	○ ○	○○○○○	△△△△△	

今回取得する○○地区については、地元から同一価格で取得されたい旨の要望があり、検討した結果、価格の調整についてはやむをえないと判断されるので調整価格算定表のとおり価格の調整を行うものである。

〔添付図書〕

1 鑑定評価書

2 位置図(縮尺5万分の1)

取得しようとする土地の位置については、今回取得区域を赤色で着色し円で囲む。また、上段に「今回申請箇所」と表示し、下段には土地の所在を表示すること。

3 一般平面図

用地取得済箇所を黄色で着色して工事も完了であれば「工事完了」と表示し、今回取得しようとする箇所を赤色で着色し、また残りの取得予定箇所を緑色で着色すること。

なお、この図面については位置図と併用でも可。

4 地域の種別の区分図、公示地、基準地、取引事例地及び標準地の位置並びに価格の表示図(縮尺1,000分の1～5,000分の1)

(1) 近隣地域の範囲を宅地地域の場合は赤色で、宅地見込地地域の場合は赤色斜線で、田地地域の場合は茶色で、畑地地域の場合は黄色で、林地地域の場合は緑色でそれぞれ着色し、「近隣地域」と表示する。

(2) 類似地域の範囲についても近隣地域の場合と同様に着色し、地域別にそれぞれ「類似地域A」、「類似地域B」、……と表示する。

(3) 標準地を赤色で、類似地域内の標準的な画地を青色でそれぞれ表示し、標準地については次の表示票をはりつける。

標準地()	
比準価格	円
収益価格	円
積算価格	円
規準価格	円
鑑定価格	円
算定価格	円

注) ()書には近隣地域の種別の区分を記入し、算定価格は朱書とする。

(4) 事例地をだいたい色で表示し、次の表示票をはりつける。

イ) 取引事例地の場合

取引事例地 No.	
所在地	
地目	
地積	
取引価格	
取引時点	
試算価格	

ロ) 賃貸事例地の場合

賃貸事例地 No.	
建物の構造	
支払賃料	

5 実測平面図(縮尺250分の1又は500分の1)

参考2 取引事例調査表

取引事例調査表			
種別	(標準地と同じ地域の種別)		番号
売主			
買主			
取引時点			
所在地			
地目	現況地目		
地積	取引面積(全体面積)		
類型	更地	建付地	借地権 底地
取引価格	総額	円	
	土地	円(円/m ²)	
	建物等	円(円/m ²)	
建物等	面積		構造
	階層		用途
	建築期		その他
取引にあたっての事情等	<p>事情なし 買進み 売急ぎ(%)程度 事情等 [事例地の概略図]</p> <p>The diagram shows a site layout. On the left, a road (市道) is 6m wide. A plot is shown with a width of 20m and a depth of 10m. To the right, another plot is shown with a width of 4m and a depth of 1m. A distance of 10m is marked between two points on the site. The road is labeled '市道' and the plot is labeled '事例地'.</p>		
取引の目的			

参考4 地域要因調査表

近 標			隣 地			地 域		
項 目			準 地			地 域		
条件	項目	細 項 目	内 容	取 引	事 例	地 域	内 訳	程 度
街条 路件	接面道路の系統・ 構造等の状態	系統及び連続性 幅員 舗装 (除雪施設等)	接面する街路の系統及び連続性は、標準的なもの					
			約〇m市道 未舗装					
交近 通条 ・ 接件	交通施設との距離 商店街との接近の 程度	最寄駅への接近性 幼稚園、小学校、 公園、病院、官公 署等	C 駅へ約〇km (C市営バス利用可)					
			C 駅前周辺の商店街へ約〇km					
環条	日照・通風・乾湿 等の良否 地勢・地質・地盤 等の良否	日照・通風・乾湿 等の良否 地勢・地質・地盤 等の良否	小学校へ約〇m、市立病院、市役所へ いずれも約〇m					
			北側に市道があり、日照・通風・乾湿 とも普通					
境件	周囲の状態 供給処理施設の状態	隣接地の利用状況 上下水道 都市ガス等	いずれも一般住宅の敷地					
			完備 無 無					
画条	地積・間口・奥行 ・形状等	危険施設・処理施設等の有無 程度	無					
			〇㎡ 約〇m					
地件	方位・高低・角地 その他接面街路と の関係	積口 行状 方位 高	北側					
			隣接街路より〇cm高、隣接地とほぼ等高					
行条 政的 その他	公法上の規制の程 度	その他 用途地域及びその 他の地域、地区等	住居地域、建ぺい率〇%、容積率〇%					
			角地その他 屋地部分 私道負担 高圧線等 無					
その他	その他	その他						
			角地その他 屋地部分 私道負担 高圧線等 無					

参考5 取得地比準調書(案)

取得地比準調書(案)の“表紙”については、標準地評価調書(案)の“表紙”に準じて作成するものとする。

土地取得価格算定表

町
郡 村
県 市 区
(単位：1㎡当たり円)

番号	地域の種別	等級	画地の所在 及び地番	現況地目	標準地 評価格 A	比準率 B	算定 価格 A×B	取得価格	摘要

- 備考1 本表は、日本産業規格A列4判縦とし、地域の種別ごと別紙とすること。
 2 比準率は、下表(個別的要因格差率算出表)により算出した格差率をもって算出すること。
 3 添付図面は位置図(1/50,000)、取得予定地の実測平面図(1/250~1/500)及び字図とする。

個別的要因格差率算出表

町
郡 村
県 市 区

番号	個 別 的 要 因 格 差 率									摘要
	街路 条件	交通接 近条件	自然的 条件	環 境 条件	宅地化 条件	画 地 条件	行政的 条件	その他	格差率	
	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	() 100	

- 備考1 本表作成の基礎となった個別的要因調査表を添付すること。
 2 本表は、日本産業規格A列4判縦とする。

[添付図面の作成]

図面は、次に掲げる種類について当該各号に定めるところに従って作成するものとする。

一 位置図

取得又は使用しようとする土地の位置については、今回の取得区域を赤色で、前回又は、関連する前年度の取得区域を黄色で色別表示するものとする。

二 実測平面図

評価地目の表示については、宅地を紅色、宅地見込地を紅色斜線、田を茶色、畑を黄色、原野を緑色斜線、墓地を紫色、道路堤塘を薄墨色、池沼及び水路を水色で色別し、必要に応じて標準地及び比準地(標準地に準じる比準地)の表示並びに地目ごとの査定等級を記入するものとする。

三 字図

取得又は使用する土地を赤色で表示するものとする。

